朝聞道、夕死可矣

福島健太郎

道とは何であろうか。「人生如何に生くべきか」、その答の様なものか

言うのである。 『論語古義』には、「人の人たる根本の道理」とある。道を知らぬ者は、 ならば、近頃の私は、畜生禽獣と一般である。 禽獣と一般だと

のである。 る。「朝聞道、夕死可矣」と言ったって、死ぬくらいなら、道なんか聞かなくたっていい かりで、生の問題を等閑視している。来る日も来る日も、息をしているだけで精一杯であ 毎日、 毎日、疾病恐怖というノイローゼに苛まれている私は、死を過度に恐れているば 徒にでも生きているだけでいい。

のである。死に至る病に、 「病膏肓に入る」である。 しかし、 より正確に言えば、私が恐れているのは、死そのものではなく、 気が触れるのではないかと、毎日怯えている。 ノイローゼも 死に至る病な

恐ロシイノダ」。では、 色々と考えてみても、恐怖が勝って決心がつかぬ。「死ハ恐ロシクハナイノデアルガ苦ガ ラムラと沸き起こってくる。鈍刀や錐では死ねぬ。剃刀でも死ねぬ。すぐに死ねる方法を ウドウシヤウ」と喚く彼に、 ほうが余程おもしろかった。彼は病床にあって、ある日俄かに精神が変になり、「サアタ の恐怖には打ち勝てなかった。この一文だけでも、 ヤクリアゲテ泣キ出シタ」。彼は死にたかったのか、死にたくなかったのか。 がら読んだのだが、 してもいいだろう。 マランタマラン」「ドウシヤウドウシヤウ」と煩悶を始める。「タマランタマランドウシヤ 先日、 正岡子規の四大随筆の一つ、『仰臥漫録』を、時に退屈しながら、時に感激しな 私には、 小刀を手に取るか取らぬか、 母親は静かに「シカタガナイ」と言う。そして、自殺熱がム 彼の俳句や和歌よりも、 『仰臥漫録』を、 二つが競って迷っているうちに、「シ 徒然なるままに書き流された随筆の 四大随筆中の筆頭と だが、

規同様、 「シヤクリアゲテ泣キ出シタ」だけであった。滑稽である。 腹に包丁を当ててみたことがある。 しかし、それは遊戯に過ぎなかった。子

う危険があるということは、附言しておく。殊に、未来を担う若者たちへ向けて。「朝聞 ノイローゼに苛まれて十数年。 「人生如何に生くべきか」などと、その様な大問題を考えている余裕は私にはない。 夕死可矣」という心意気をもって生きてもらいたいと願う。 如何に生くべきかと思索しないで生きることは、 馬鹿馬鹿しく空しい毎日をどうにかこうにか生きてい 虚無の奈落に落っこちてしま